

がん患者体験記◎浅川澄一

現在、がん治療まっただ中の浅川澄一さんによる体験記です



③ 17%の負担で済む医療費、高額療養費制度を活用

抗がん剤の治療がやっと折り返し点を過ぎた。6月25日に7回目、残りはあと5回。隔週ごとにがん研究会有明病院に通院し、血液検査で白血球が基準以下に減っていなければ、午後から抗がん剤エルプラットを点滴で入れる。2時間後には、別の抗がん剤5-FUの入ったゴム玉をペットボトル型の容器に押し込み、肩からぶら下げて帰宅。46時間後に自宅を外す。この繰り返しだ。

5月下旬頃に、口の中に違和感が出て、食事の味がわからなくなる。右手の親指の皮がむけだし、さわると痛みを感じる。手先のしびれに止まっていた副作用が本格化してきたのか。6月8日には歩行中のふらつきが起きる。「えっ」と思わずびくつく。倦怠感も強まるが、日常生活には支障ないのでこのまま抗がん剤は続けようと思う。



さて、がん研究会有明病院の医療費はどのくらいかったのか、点検してみる。

まず、1月17日の最初の診察は画像診断料の1万1,262円などで1万9,370円支払う。その直後からMRIや内視鏡などの検査が5回続き、1月は合計で8万5,730円。保険点数は2万8,575点で

抗がん剤の副作用で親指の皮がむけてしまう。手足症候群という。親指の先に力を加えると痛い。ペンが持ち難くなり不便だ



その3割が自己負担となるからだ。

2月は手術をしたので相当な高額となるかと思ったが、10万2,031円で済んだ。なぜか。「高額療養費」という患者の支払い負担を軽くする医療保険の特別制度のおかげである。患者の所得によって3段階ある。最も多いのが「一般所得者」という2段階目で、自己負担限度額は、「8万100円＋（医療費－26万7,000円）×1%」という数式で計算する。

月収53万円以上の上位所得者は、「15万円＋（医療費－50万円）×1%」で、低所得者の場合は、3万5,400円である。私の場合は「一般所得者」に該当する。

数式に当てはめると、かかった医療費の保険点数が24万6,008点なので実額は246万80円。これから26万7,000円を引くと219万3,080円。その1%は2万1,931円。最後に8万100円を加えるから10万2,031円となる。

つまり246万円の医療費がかかったのに、実際

がんの治療費用（医療保険分）

	医療費	実際の支払い額
1月	28万5,750	8万244
2月	246万80	10万2,031
3月	48万4,510	8万2,275
4月	44万2,170	4万4,400
5月	36万6,510	4万4,400
合計	428万3,620	75万2,925（円）

健康保険限度額適用認定証

平成26年1月30日交付

記号 100 番号 2140

被保険者 氏名 浅川 澄一 性別 男

生年月日 癸正・昭和・平成 23 年 2 月 8 日

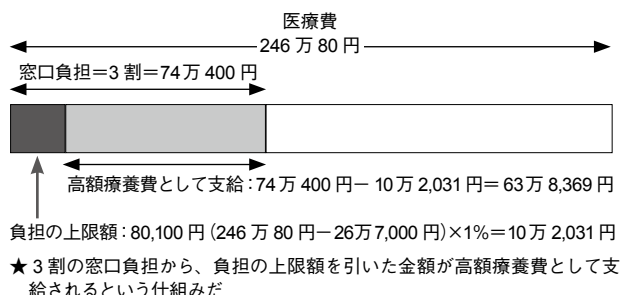
適用者 氏名 被保険者本人 性別 男

高額療養費の必要書類。勤務先だった会社から取り寄せた



福祉ジャーナリスト（前・日本経済新聞社編集委員）
慶應大学卒後に日本経済新聞社に入社。小売り・流通業、ファッション、家電、サービス産業などを担当。87年に月刊誌『日経トレンディ』を創刊、初代編集長。流通経済部長、マルチメディア局編成部長などを経て、98年から編集委員。高齢者ケア、少子化、NPOなどを担当。2011年2月に定年退社。公益社団法人長寿社会文化協会（WAC）常務理事。66歳。

高額医療費制度の仕組み



の支払額は10万円強で済んでしまった。わずか4%の負担だ。

私の病室は窓際のベッドにしたので、差額ベッド代（1日5,000円）が5万円加わり、食費と病衣料なども合わせると保険外の合計支払いは6万2,300円となる。



3月は、抗がん剤の治療入院が5日あったが、同じように高額療養費が適用できるので、医療費48万4,510円に対して、私が支払ったのはわずか8万2,275円。差額ベッド代など保険外の支払いを含めて11万395円となった。

この高額療養費を適用すると、月間の医療費は大体8万円台から10万円前後で済んでしまう。通常の病院通いでは、この制度を活用したことはなかった。3割負担の医療保険制度とは別にこんな大幅の軽減措置があることは知らなかった。実は1月も高額療養費が適用されることになっていた。6回の検査の合計医療費が28万5,750円で26万4,000円を超えたからだ。検査ごとに3割負担分を支払っていたが、後日に清算した。

この算式による高額療養費は3か月限り。4か月目以降からは、「一般所得者」の場合は上限が一律4万4,400円になる。つまり、4月からは、どんなに医療費が高額になっても4万4,400円以上の支

払いはないということだ。上位所得者は8万3,400円、低所得者は2万4,600円が上限となる。

私は、1月17日から、がん研究会有明病院に通院、入院しているので、1、2、3月の3か月間の保険料支払いは8万～10万円台だったが、4か月目に入った4月は、4万4,000円に切り替わった。つまり、保険の30%負担ではなく、高額療養費の4か月目以降が適用されたのでかなり安い支払いで済んだというわけだ。

抗がん剤は相当高額である。5月は8日と22日に4回目と5回目の抗がん剤治療を受けたが、それぞれ18万7,930円、17万8,580円もかかった。これを隔週ごとに12回投与することになっており、ざっと計算すると総額で約220万円になる。

このまま続けると9月までかかる。そこへ高額療養費を適用すると、4月から6か月間だから、4万4,400円×6で26万6,400円におさまる。220万円とは大きな差だ。

以上の医療費と保険外支払額の1月から5月までの総合計は84万3,445円となった。うち医療費だけだと75万2,925円となる。もし保険制度がなかったとすると、合計医療費は428万3,620円である。医療費の自己負担はわずか17.6%というわけだ。相当に軽い。保険制度としてはなかなか優れた仕組みのように感じられる。

この高額療養費の内容は、2015年1月から大幅に変わる。高額所得者への負担を重くしようという狙いで、月額所得が53万円を超えると限度額が上がる。月額所得が28万円から53万円未満であれば今までどおりだ。

高額所得者には負担割合を高くするのは、医療費に限らず介護保険でも広がっていくだろう。ただ、所得のどのラインで「高額所得者」の線引きをするかが問われる。